

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770175

研究課題名(和文) 古代日本語における形容詞と動詞の文法的性質とその変遷

研究課題名(英文) The grammatical properties and historical development of adjectives and verbs in pre-modern Japanese

研究代表者

安本 真弓 (YASUMOTO, Mayumi)

山口大学・人文学部・講師

研究者番号：20636287

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)： 古代日本語には、「なほし」と「なほす」のような現代日本語では見られない形容詞と動詞の対がある。そこで、このような対が現代語よりも古代語で多く見られる理由や対の有無による相違を検討することで、古代語用言の文法的性質と現代語につながる変遷を明らかにすることが本研究の目的である。

そのため本研究では、上代から中世における形容詞と動詞の全体像を視野に入れ、対の有無という形態的側面と形容詞・動詞それぞれの文法的性質との関係、さらには時代ごとの特色とその変遷について検討を行った。また、その過程で形容詞の意味的性質と対の有無という形態的側面との関係についても考察した。

研究成果の概要(英文)： In pre-modern Japanese, we observe pairs of adjectives and verbs sharing the same stem that no longer exist in the modern language. The purpose of this study is to examine the grammatical characteristics of verbals in pre-modern Japanese and explain how such a system of verbals developed into the system that we see today. This study aims to answer the questions, 'Why were adjective-verb pairs more common in early stages of the language?' and, 'How do the meanings of verbals change depending on whether or not they are part of a morphological pair?'

To achieve these goals, I conducted a thorough analysis of adjectives and verbs from Old Japanese to Late Middle Japanese, paying specific attention to how the existence of a morphologically corresponding verb or adjective affects grammatical properties. From this perspective, I examined the historical development of verbals and their characteristics in each individual period of the language.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史

### 1. 研究開始当初の背景

これまで、形容詞と動詞の成り立ちについては、阪倉篤義(1961)や山口佳紀(1985)、釘貫亨(1996)、東辻保和(1974)、関一雄(1979)などが用言の語形成の問題として指摘している。しかし、形態的な観点から考察する側面が強く、形容詞と動詞を対としてとらえ、各品詞の相違を明らかにしようとしているわけではない(安本真弓(2010))。

また、川端善明(1976)や山田孝雄(1950)のような、形容詞の原理的な性質や形容詞と動詞の相違について触れた研究もあるが、どちらかと言えば現代語が考察の中心である。そのため、古代語における形容詞及び動詞の文法的性質とその変遷を明らかにするという点では、今後検討する余地は残されていると考えられる。

### 2. 研究の目的

古代日本語には、「なほし」と「なほす」のような現代日本語では見られない形容詞と動詞の対がある。では、なぜこのような対が古代語では現代語よりも多く見られるのであろうか。このような対が現代語よりも古代語で多く見られる理由や対の有無による相違を検討することで、古代語における形容詞と動詞の文法的性質を明らかにし、また現代語へとつながる史的変遷を明らかにすることが本研究の目的である。

具体的には、研究期間内に以下の(1)~(3)を明らかにしたいと考えた。

- (1) 古代語の形容詞・動詞を量的に把握し、これらが形態的にどの程度対応を持つのかを明らかにする。
- (2) 対応をもつ形容詞・動詞と対応をもたないそれがどのように異なるのかを検討し、古代語に多くの形容詞と動詞の対が見られる理由やこのことが持つ意味を明らかにする。
- (3) 以上のことをふまえ、古代語における形容詞と動詞の対の有無という形態的な側面と形容詞・動詞それぞれの文法的性質との関係、時代ごとの変遷について明らかにする。

### 3. 研究の方法

研究の目的を達成するために、研究方法としては、以下の手順を考えた。

- (1) 上代から中世の文学作品における形容詞・動詞の異なり語数と延べ語数を先行研究の結果や索引・古典本文の電子データをもとに収集を行う。
- (2) 収集したデータの分類を行うために、形容詞と動詞を対としてとらえる視点を検討し、形態的に対になるということの語

構成上の枠組みを構築する。

- (3) 収集した形容詞と動詞に対し、(2)をもとに、形態的な対を分類するための情報付加(タグづけ)を行う。
- (4) コンピュータ・ソフト(形態素解析ツール)を利用したデータの分類・整理を行い、調査結果を確定させる。
- (5) 上代から中世において形態的な対が見られるものと見られないものとを比較し、対の有無による形容詞・動詞の文法的性質の共通点と相違点について、体系的に分析をすすめる。
- (6) 対の有無にも着目しながら、形容詞及び動詞の時代ごとの特徴とその通史的变化を分析する。

### 4. 研究成果

本研究は、上代から中世における形容詞と動詞の全体像を視野に入れ、対の有無という形態的側面と形容詞・動詞それぞれの文法的性質との関係を明らかにすることを試みたものである。

研究内容としては、具体的には、以下の(1)~(5)を行った。

- (1) 古代語の形容詞・動詞の異なり語数や延べ語数といった量的側面を把握し、これらが形態的にどの程度対応を持つのかを検討する。
- (2) 形容詞の意味分類とその分類のための指標について検討する。
- (3) 形容詞の意味を考慮しつつ、対応をもつ形容詞・動詞と対応をもたないものとを比較し、その特徴を検討する。
- (4) 古代語に多くの形容詞と動詞の対が見られる理由やその意味について、各品詞の文法特性と関わらせながら考察する。
- (5) 現代に向かうに従い、形容詞と動詞の対応が減少することをふまえ、上代から中世までの形容詞・動詞の対応と文法的性質の変遷のあり様を明らかにすることを試みる。形容詞及び動詞の時代ごとの文法的性質を検討すると同時に、その通史的变化の一端を考察する。

ただし、(1)については、研究計画の際に予測できなかったこととして、『日本語歴史コーパス』の公開があげられる。

本研究では、研究当初から一貫して、「上代から中世の文学作品における形容詞・動詞の異なり語数と延べ語数を先行研究の結果や索引・古典本文の電子データをもとに収集

する」こととし、その自己の収集結果をもとに研究を進めていた。しかし、『日本語歴史コーパス』が平安時代編を先行公開し、その後、鎌倉時代編、室町時代編と順次公開作品を増やしていくに従い、自己のデータと『日本語歴史コーパス』での調査結果を比較する必要性を強く感じた。『日本語歴史コーパス』は、「短単位」「長単位」という言語単位を採用しているが、これらは通時的な日本語研究で利用するために現代語のコーパスとの互換性の保持が図られており、この点からも、これから先様々な作品の公開にあわせて長く活用すべきコーパスであると感じるからである。だが、膨大な自己のデータと『日本語歴史コーパス』との比較は、研究方法の(2)で示した形容詞と動詞が形態的に対になるということの語構成上の枠組みは作成できているが、簡単に行えるものではなく、この点については今後の課題としたい。

(2)については、実際に研究を進めていく中で、研究当初想定していたよりもさらに、形容詞の意味分類について考察したうえで形容詞と動詞の対を検討すべきであるということが分かってきた。形容詞全体で対の有無を見るだけでは、その傾向をつかむことが難しいからである。

そこでまずは、形容詞の意味をどの程度分類することが妥当であるのか、また、多義であり、なおかつ現代語と異なり内省に基づいて判断することができない古代語形容詞の意味分類をどのようにして行うのが良いのかという点について、当初予定した研究計画には含まれていなかったが、検討した。

その結果、形容詞は一般的に「感情形容詞」と「属性形容詞(状態形容詞)」の二つに大別されることが多いが、さらに細分化し、「感情」「感覚」「評価」「程度」「状態」「否定」の六つの意味に区分することが妥当であると考えた。また、『源氏物語』を用いて、中古形容詞における意味分類の指標を提案した。さらに、その指標を用いて『源氏物語』の用例を分類し、「感情」「感覚」「評価」「程度」「状態」「否定」といった各意味分類の特徴について指摘した。

この点について、本研究の意義・特色としては、一つには、個々の用例を見ただけで意味分類を行うという方法をとるため、その時代に実際に用いられた意味で分類することができるという点が挙げられる。本研究の方法によって、形容詞が多義である、あるいは史的変遷が見られるため意味分類しにくいという従来の問題点を克服することができるだろう。

また、本研究の意義・特色の二つ目としては、地の文であるのか、会話文(内心文)であるかを区分したうえで、主体や対象、あるいは「おもふ」などの判断や思惟であることを表す語との共起関係といった外形的な観点から意味区分をしようとするのが挙げ

られる。このような視点は、細川英雄(1989)などの先行研究にも見られるが、細川氏が分類を行ったのは現代語であり、本研究では、現代語ではなく古代語において実際の用例をみながら分類を試みたということが重要であると考えられる。これまでの辞書的な意味に頼るような意味分類ではなく、主体や対象といった、より客観的なものを指標とすることで、内省のきかない古代語でも分類することができ、なおかつ、分類を行う者による結果への個人差が生じにくいということが、本研究における意味分類の意義であろう。

(3)については、(2)を踏まえて、形容詞の意味分類ごとに、形容詞と動詞が対応を持つか否かを検討することにした。

その際、この点も研究計画の際には予測できなかったことだが、2014年に宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉編『日本古典対照分類語彙表』が刊行された。日本語の形容詞研究には、既に多くの語彙的考察の積み重ねがあり、その中には語彙体系に関する研究も含まれている。そこで、このような語彙の意味的範疇・意味分野の研究と形容詞・動詞の対の有無という形態的な側面とを関連付けながら研究を進めることにした。

例えば、「感情」を表す形容詞に該当する「分類語彙表」の項目は、「相の類」の「3.3 精神及び行為」の「3.30 心」であると考えられる。先に(2)で考察した形容詞の意味分類に加え、『日本古典対照分類語彙表』における分類も考慮することによって、より客観的に意味と形態との関わりを検討することができると考えられる。

ただしその際、「分類語彙表」の項目をそのまま踏襲して良いのか、さらに検討すべき点はないのかということも考察した。その結果、一つは、「分類語彙表」の各項目に抽象的なものと具体的なものとが混在していることが分かった。例えば、3.30「心」の下位項目に、「心」という抽象的なものがある一方で、「恐れ・怒り・悔しさ」などの具体的なものがあり、このような点については検討すべきであると考えた。また、二つ目として、「感情」や「評価」といった形容詞の意味分類に関しては、下位区分として「プラス」と「マイナス」、その「中間」の三種類に大別するという観点を導入すべきではないかと考えた。例えば「分類語彙表」の「3.3013」は「安心・焦燥・満足」とあるが、「安心・満足」はプラスの感情、「焦燥」はマイナスの感情であり、このようなプラス・マイナスの対応のあり方などを整理することで、より形容詞の意味を体系的に分かりやすく示すことができると考えられる。

以上の観点から、古代語形容詞の意味をそれぞれ考察し、その意味と『日本古典対照分類語彙表』で配置された項目とを見比べ、各項目の名称などを検討した。その結果、「分類語彙表」の項目名の変更や、項目に示され

た意味的範疇の削除、感情・評価の「プラス」と「マイナス」といった対比に注目して意味的範疇を項目に追加するなどのことを新たに行った。このことにより、対応をもつ形容詞・動詞と対応をもたないそれがどのように異なるのかを検討する前提として、より客観性のある形容詞の意味分類のあり方や「プラス」「マイナス」「中間」といった感情・評価の下位分類の観点を整理することができ、各品詞の文法特性について精緻に考察する基盤を作ることができたと考える。

以上のことから、(3)～(5)では、形容詞の意味や「プラス」「マイナス」「中間」といった観点をもち、古代語における形容詞と動詞の対の有無と形容詞・動詞それぞれの文法的性質との関係について検討した。

その結果、一つには、(2)の形容詞の意味的性質によって、動詞との対の有無のあり様が異なっていることが分かった。具体的には、最も形容詞と動詞が対応を持つのは、「感情」を表している対であり、次に「評価」が続く。その次の「感覚」と「状態」は類似する結果であり、「程度」や「否定」は基本的に対を持たないという特徴がうかがえた。

二つ目として、文法特性という観点から形容詞と動詞の対をみると、この点も形容詞の意味ごとに対応要因が異なることが分かった。例えば、「感情」を表す形容詞と動詞の対においては、感情の描き方という点で形容詞と動詞が異なっている。「評価」については、モノ・コトのあり様を主観的に判断するのか、客観的に判断するのかといった点で形容詞と動詞に相違が見られた。「状態」における形容詞と動詞の対では、構文的機能における相補的なあり方が対応要因に深く関わっていることが分かった。この「状態」については、どのようにして形容詞と動詞が対をなしているのかといった語構成や用法の違いという観点からも検討し、それらの相違によって対応要因に差があることも明らかにした。

また、形容詞と動詞の形態的な対のあり様から、語の存続の消長の傾向がうかがえることも分かった。具体的には、どのような語構成によって対をなしているのかといった対のあり方や対の有無によって、平安時代や鎌倉時代といった時代区分を超えて語が使用されているかという点に違いが見られるのである。

加えて、「感情」を表す形容詞と動詞の異なり語数や延べ語数を平安時代と鎌倉時代の作品で比較すると、平安時代では感情形容詞の使用が高い傾向にあるのに対し、鎌倉時代では感情動詞の割合が高くなっている作品が見られることも分かった。さらに、女性作家と男性作家、あるいは作品のジャンルによっても、形容詞を用いるのか、対となる動詞を用いるのかといった点で差が見られた。このような点からも古代語における形容詞

と動詞の対の有無と形容詞・動詞それぞれの文法的性質との関係を探るヒントが隠されていると考え、考察を行った。

さらに、本研究に付随して得られた点としては、一つには、時代ごとの形容詞の類義関係とその量的なあり様を見ることができたことが挙げられる。例えば、平安時代の散文20作品をもとに、この時代の形容詞の類義関係と「プラス」「中間」「マイナス」といった区分との関係を明らかにし、それぞれの異なり語数と延べ語数を示した。ここから、平安時代に使用頻度の多い感情内容や感情形容詞などを明らかにすることができた。

二つ目は、平安時代の各20作品において、「プラス」「マイナス」といったどの感情区分に異なり語数や延べ語数が集中しているのかを検討した。その結果、どの作品でも基本的に異なり語数と延べ語数の両方において「マイナス」の感情に語彙が集中していることが分かった。しかし、特色ある傾向を示す作品も若干見られ、その理由についても考察した。

以上のように、本研究は、古代語における形容詞と動詞の対の有無という形態的な側面と形容詞・動詞それぞれの文法的性質との関係、時代ごとの特色とその変遷について明らかにすることを目的に進めてきた。しかし、新たなコーパスの作成や先行研究の出現といった研究当初には予測できなかった事態が生じたことや、形容詞の意味について考察することを加えたために、残された課題も多い。特に、語彙体系として考察するだけでなく、個別の語における通史的な検討も研究当初は念頭においていたが、この点も含めて今後の課題としたい。

しかし、本研究を進めていくことは、日本語史における用言研究という点で貢献できると考える。また、今後本研究の成果を現代語や方言のあり様と比較することで、日本語史にとどまらず、現代語や方言における用言研究にも寄与できるものと考えられる。

#### 引用文献

- 川端善明(1976)「用言」大野晋・柴田武編『岩波講座日本語第6巻 文法』岩波書店、169-217頁
- 釘貫亨(1996)『古代日本語の形態変化』和泉書院
- 阪倉篤義(1961)「古代日本語における名詞の構成」『国語国文』30-11、1-22頁
- 関一雄(1979)「接尾語「ぶ」「む」「めく」「だつ」「がる」の消長(一) 平安時代仮名文学の用例を中心に」『山口大学文学会誌』30、45-65頁
- 東辻保和(1974)「接尾辞「がる」「ぶ」「む」の対立 その意義論的考察」『国文学攷』64、1-14頁
- 細川英雄(1989)「現代日本語の形容詞分類について」『国語学』158、91-103頁

宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉  
編（2014）『日本古典対照分類語彙表』  
笠間書院  
安本真弓（2010）「古代日本語における  
形容詞と動詞の対応形態とその史的変  
遷」『国語学研究』第49集、110-124頁  
山口佳紀（1985）『古代日本語文法の成  
立の研究』有精堂出版  
山田孝雄（1950）『日本文法学要論』角  
川書店

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

安本真弓（2017）「参考文献を探す」大  
木一夫編『ガイドブック日本語史調査  
法』第9章、ひつじ書房（査読なし）（掲  
載決定）

〔学会発表〕（計2件）

安本真弓（2015.5.10）「語の意味記述試  
論 感情形容詞を例として」山口大学  
人文学部国語国文学会、山口大学（山口  
県・山口市）

安本真弓（2014.12.20）「中古形容詞の  
意味とその分類方法について」黒髪古典  
研究会、熊本大学（熊本県・熊本市）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

安本真弓（YASUMOTO, Mayumi）  
山口大学・人文学部・講師  
研究者番号：20636287

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

なし